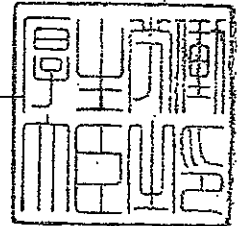


厚生労働省発食安0811第6号
平成21年8月11日

薬事・食品衛生審議会
会長 望月 正隆 殿

厚生労働大臣 舩添 要



諮 問 書

食品衛生法（昭和22年法律第233号）第11条第1項の規定に基づき、下記の事項について、貴会の意見を求めます。

記

次に掲げる農薬の食品中の残留基準設定について

メタラキシル及びメフェノキサム

平成21年11月27日

薬事・食品衛生審議会
食品衛生分科会長 岸 玲子 殿

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会
農薬・動物用医薬品部会長 大野 泰雄

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会
農薬・動物用医薬品部会報告について

平成21年8月11日厚生労働省発食安0811第6号をもって諮問された、食品衛生法（昭和22年法律第233号）第11条第1項の規定に基づくメタラキシル及びメフェノキサムに係る食品規格（食品中の農薬の残留基準）の設定について、当部会で審議を行った結果を別添のとおり取りまとめたので、これを報告する。

メタラキシール及びメフェノキサム^{注)}

今般の残留基準の検討については、農薬取締法に基づく新規の農薬登録申請に伴う基準値設定依頼が農林水産省からなされたことに伴い、食品中のポジティブリスト制度導入時に新たに設定された基準値（いわゆる暫定基準）の見直しを含め、食品安全委員会において食品健康影響評価がなされたことを踏まえ、農薬・動物用医薬品部会において審議を行い、以下の報告をとりまとめるものである。

1. 品目名：メタラキシール[Metalaxyl (ISO)]及びメタラキシールM[Metalaxyl-M (ISO)]

注) 「メフェノキサム」は、メタラキシールMの別名である。本報告書中ではISO名に従って「メタラキシールM」で統一している。

メタラキシールは、D体とL体の2つの鏡像異性体を1:1の割合で含有するラセミ体とされる。2つの鏡像異性体のうち、殺菌活性を示すのは主にD体とされ、D体がメタラキシールMと称される。

2. 用途：殺菌剤

メタラキシール及びメタラキシールMは 酸アミド系殺菌剤であり、菌糸伸長及び胞子形成を阻害することで、特に卵菌綱ツユカビ目の糸状菌に対して防除効果を有するとされる。

3. 化学名：

① メタラキシール

methyl *N*-(methoxyacetyl)-*N*-(2,6-xylyl)-DL-alaninate (IUPAC)

methyl (*RS*)-2-{[(2,6-dimethylphenyl) methoxyacetyl] amino} propionate (IUPAC)

methyl *N*-(2,6-dimethylphenyl)-*N*-(methoxyacetyl)-DL-alaninate (CAS)

② メタラキシールM

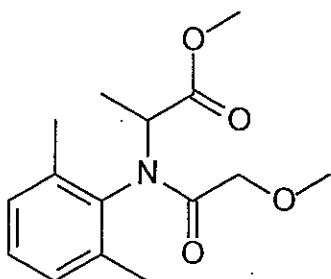
methyl *N*-(methoxyacetyl)-*N*-(2,6-xylyl)-D-alaninate (IUPAC)

methyl (*R*)-2-{[(2,6-dimethylphenyl) methoxyacetyl] amino} propionate (IUPAC)

methyl *N*-(2,6-dimethylphenyl)-*N*-(methoxyacetyl)-D-alaninate (CAS)

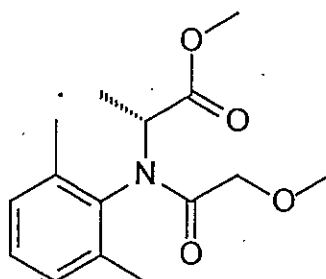
4. 構造式及び物性

①メタラキシル



分子式 $C_{15}H_{21}NO_4$
分子量 279.34
水溶解度 8.4g/L (22°C)
分配係数 $\log_{10}Pow=1.75$ (25°C)

②メタラキシルM



分子式 $C_{15}H_{21}NO_4$
分子量 279.34
水溶解度 26g/L (25°C)
分配係数 $\log_{10}Pow=1.71$ (25°C)

(メーカー提出資料より)

5. 適用病害虫の範囲及び使用方法

本薬の適用病害虫の範囲及び使用方法は以下のとおり。

今般、農薬取締法に基づき、メタラキシルMの農薬登録申請（ピーマン等）がなされた。製剤名・農作物となっているものが、メタラキシルMに係る申請であることを示す。

(1) 国内での使用方法

① 25.0%メタラキシル水和剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	メタラキシルを含む農薬の総使用回数
キャベツ はくさい たまねぎ	苗立枯病 (ピシウム菌)	種子重量の 0.3~0.5%	は種前	1回	種子粉衣	4回以内 (種子粉衣は1回 以内、は種後は 3回以内)
ほうれんそう						2回以内 (種子粉衣は1回 以内、は種後は 1回以内)
だいこん						2回以内 (種子粉衣は1回 以内、土壌混和は 1回以内)
にんじん						1回
だいず		種子重量の 0.3%				4回以内 (種子粉衣は1回 以内、は種後は 3回以内)
えだまめ						1回
野菜類 (豆類(未成熟) を除く) 飼料作物	ピシウム菌 による病害 (苗立枯病等)	種子重量の 0.3~0.5%	は種前	1回	種子処理機 による 種子粉衣	1回
未成熟 とうもろこし		種子重量の 0.5%				1回
豆類(未成熟) 豆類(種実)		種子重量の 0.3%				

② 2.0%メタキラシル粒剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	メタキラシルを含む農薬の総使用回数
稲	黄化萎縮病	6kg/10a	収穫90日前まで	2回以内	散布	4回以内 (種もみ粉衣は1回以内、移植前の土壌混和は1回以内、育苗箱への灌注は1回以内、本田では2回以内)
くわい	茎腐病		収穫21日前まで		湛水散布	
みょうが(茎葉)	根茎腐敗病	10~20kg/10a	みょうが(茎葉) 収穫30日前まで、但し、花穂を収穫しない場合にあては開花期終了まで	3回以内	定植前 作条土壌混和 又は生育期 土壌表面散布	2回以内
みょうが(花穂)			収穫30日前まで			
しょうが			収穫21日前まで	3回以内	定植前 作条土壌混和 又は生育期 土壌表面散布	3回以内
葉しょうが			収穫21日前まで			
ホップ	べと病	10~20g/株	株ごしらえ時~選芽期	1回	株元土壌混和 又は 土壌表面散布	1回
たらのき	立枯疫病	20kg/10a	収穫終了後(苗の場合は植付後)~梅雨期	2回以内	土壌表面散布	2回以内
いちご	疫病	10kg/10a	定植時	1回	作条土壌混和	5回以内 (種子粉衣は1回以内、育苗期は3回以内、定植時の土壌混和は1回以内)
	根腐病					
こんやく			5~10kg/10a		培土時	
ピーマン	疫病	2~3g/株	収穫前日まで	3回以内	株元散布	4回以内 (種子粉衣は1回以内、は種後は3回以内)
パセリ		10~20kg/10a	収穫21日前まで			

② 2.0%メタキラシル粒剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	メタキラシルを含む農薬の総使用回数
せり	葉腐病	6kg/10a	収穫 21 日前まで	1 回	散布	2 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 は種後は 1 回以内)
こまつな	白さび病	10kg/10a	は種前 但し、収穫 21 日前まで		全面土壌混和	2 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 土壌混和は 1 回以内)
みずな			は種時又は 定植時			
ほうれんそう	べと病	9kg/10a	は種時	2 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 は種時は 1 回以内)		
チンゲンサイ	白さび病	9kg/10a	は種時又は 定植時	1 回	全面土壌混和	2 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 は種後は 1 回以内)
かぶ		10kg/10a	は種時			2 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 土壌混和は 1 回以内)
タアサイ		6kg/10a	定植時			2 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 土壌混和は 1 回以内)
だいこん		9kg/10a	は種時	作条土壌混和	2 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 土壌混和は 1 回以内)	
オクラ	疫病	10kg/10a	収穫前日 まで	3 回以内	株元散布	4 回以内 (種子粉衣は 1 回以内、 は種後は 3 回以内)

③ 10%メタラキシル・65%TPN水和剤

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	使用 液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用 方法	メタラキシルを 含む農薬の 総使用回数
きゅうり	べと病 炭疽病 うどんこ病 褐斑病	1000倍	100~400 L/10a	収穫前日 まで	3回以内	散布	4回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は 3回以内)
かぼちゃ	べと病			収穫7日前 まで			
メロン	つる枯病 べと病 うどんこ病			収穫3日前 まで			
すいか	つる枯病 炭疽病 褐色腐敗病			収穫7日前 まで			
トマト	疫病			4回以内	収穫前日 まで		5回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は 4回以内)
なす	褐色腐敗病	収穫前日 まで					
はくさい	白さび病 ビショム腐敗病 べと病	2回以内	4回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は 3回以内)				
ばれいしょ	疫病	500~750倍	3回以内	3回以内	3回以内		
	夏疫病	750倍					
たまねぎ	べと病 灰色かび病	1000倍	100~400 L/10a	収穫7日前 まで	2回以内	4回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は 3回以内)	
ねぎ	べと病			収穫14日前 まで			
らっきょう	白色疫病			3回以内			

④55%マンゼブ・10%メタラキシル水和剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	メタラキシルを含む農薬の総使用回数					
ばれいしょ	疫病	500~750倍	—	収穫7日前まで	3回以内	散布 無人ヘリコプターによる散布	3回以内					
たまねぎ	白色疫病						8倍	1.6L/10a	4回以内 (種子粉は1回以内、 は種後は3回以内)			
							12倍	2.4L/10a				
はくさい	べと病	1000倍	—	収穫30日前まで	1回	散布	4回以内 (種子粉は1回以内、 は種後は3回以内)					
キャベツ				収穫前日まで	3回以内							
ねぎ												
きゅうり				収穫7日前まで	3回以内							
メロン				花蕾形成前まで、 但し、 収穫21日前まで								
ブロッコリー				収穫60日前まで	2回以内			2回以内 (但し開花後1回)				
小粒種ぶどう (露地栽培)				開花前まで	2回以内							
大粒種ぶどう (露地栽培)												
ぶどう (施設栽培)				疫病	1000倍			—	収穫30日前まで	3回以内	散布	3回以内
パッションフルーツ				白色疫病					500倍			開花後(10月)~4月 但し、 収穫30日前まで
らっきょう	疫病	1000倍	—	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内					
すいか	褐色腐敗病											
みかん	疫病	750倍	—	収穫30日前まで	2回以内	散布	2回以内					
トマト	疫病			750倍			収穫前日まで	5回以内 (種子粉衣は1回以内、 は種後は4回以内)				

④55%マンゼブ・10%メタラキシル水和剤 (つづき)

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	メタラキシルを含む農薬の総使用回数
わさび だいこん	白さび症	500倍	200~400 L/10a	収穫14日前 まで	3回以内	散布	4回以内 (種子粉衣は1 回以内、 は種後は 3回以内)
いちご	疫病	1000倍	50 ml/株 (200~400 L/10a)	育苗期			5回以内 (種子粉衣は1 回以内、 育苗期は 3回以内、 定植時の 土壌混和は 1回以内)
あずき	茎疫病	500倍	100~300 L/10a	収穫30日前 まで			4回以内 (種子粉衣は1 回以内、 は種後は 3回以内)
だいず				収穫45日前 まで			

⑤75.6%塩基性塩化銅・8.0%メタラキシル水和剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	メタラキシルを含む農薬の総使用回数
みかん	褐色腐敗病	750倍	収穫14日前 まで	2回以内	散布	2回以内
ばれいしょ	疫病	400~600倍		収穫前日 まで		3回以内
トマト			4回以内			5回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は 4回以内)
ミニトマト					3回以内	4回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は 3回以内)
かぼちゃ	800倍	収穫14日前まで	3回以内			
きゅうり		べと病		収穫前日まで		
すいか	褐色腐敗病 果実汚斑細菌病	400~600倍	収穫7日前 まで	3回以内	4回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は 3回以内)	
メロン	べと病					
たまねぎ	べと病	400~600倍	収穫7日前 まで	3回以内	4回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は 3回以内)	
ひろしまな	白さび病	600~800倍				
みつば	べと病	800倍	収穫14日前 まで	1回	散布	2回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は 1回以内)
うど	疫病		伏込時 (収穫25日前 まで)			根株 瞬間 浸漬

⑥30.0%ヒドロキシイソキサゾール・4.0%メタラキシル液剤

作物名	適用 病害虫名	希積 倍数	使用 時期	本剤の 総使用 回数	使用方法	メタラキシルを 含む農薬の 総使用回数
稲 (箱育苗)	苗立枯病 (フザリウム菌、 ピシウム菌) ムレ苗防止 根の生育促進 移植時の発根 及び活着促進	500～ 1000 倍	は種時 又は 発芽後	1回	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約5L) 1箱当り希釈液 500mLを土壌灌注する。	4回以内 (移植前の 土壌混和は 1回以内、 育苗箱への 灌注は1回以内、 本田では 2回以内)
		1000 倍	は種時		育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約5L) 1箱当り希釈液 1Lを土壌灌注する。	

⑦4.0%ヒドロキシイソキサゾール・0.5%メタラキシル粉剤

作物名	適用病害虫名 使用目的	使用量	使用 時期	本剤のみ を使用す る場合の 使用回数	使用方法	メタラキシル を含む 農薬の総 使用回数
稲 (箱育苗)	苗立枯病 (ピシウム菌)	置床 1m ² 当り 50g	緑化 始期	1回	置床表土に 均一に混和	4回以内 (但し、 本田期は 2回以内)
	苗立枯病 (ピシウム菌、 フザリウム菌) 根の生育促進 ムレ苗防止	育苗箱 (30×60× 3cm、使用 土壌約5L) 1箱当り 6～8g	は種前		育苗箱土壌に 均一に混和	
	根の生育促進 による 苗立の安定	乾籾重量 の3%			過酸化カルシウム 剤に添加して 種籾に粉衣する	
稲 (湛水直播)	根腐病	5kg/10a	植付時		植溝土壌混和	1回

⑧1.5%フルトラニル・1.5%メタラキシル粉剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	メタラキシルを含む農薬の総使用回数
こんにゃく	根腐病	5kg/10a	培土時 (但し収穫 30日前まで)	1回	株元散布 (散布後土寄せ)	1回
		5~10kg/10a	植付時		植溝土壌混和	
		20kg/10a			全面土壌混和	
	白絹病	5kg/10a	培土時 (但し収穫 30日前まで)		株元散布 (散布後土寄せ)	
		20kg/10a	植付時		全面土壌混和	

⑨1.0%メタラキシルM粒剤

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	メタラキシルM及びメタラキシルを含む農薬の総使用回数
ピーマン	疫病	3g/株	収穫前日まで	3回以内	株元散布	4回以内 (種子粉衣は1回以内、 は種後は3回以内)
みょうが	根茎腐敗病	20kg/10a	収穫30日前まで	2回以内	土壌表面散布	2回以内

⑩3.3%メタラキシルM・32%TPN水和剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	メタラキシルM及びメタラキシルを含む農薬の総使用回数
ばれいしょ	疫病	800~1000倍	100~400 L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内
トマト				収穫前日まで	4回以内		5回以内 (種子粉衣は1回以内、 は種後は4回以内)
きゅうり	べと病	800~1000倍		収穫3日前まで	3回以内		4回以内 (種子粉衣は1回以内、 は種後は3回以内)
メロン				収穫7日前まで			
たまねぎ				収穫14日前まで	2回以内		
ねぎ				収穫7日前まで			
はくさい	800倍	収穫7日前まで	3回以内				
なす	褐色腐敗病	収穫前日まで					

⑪ 64%マンゼブ・3.8%メタラキシルM水和剤

作物名	適用 病害虫名	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用 方法	メタラキシルM 及び マンゼブを 含む農薬の 総使用回数
ばれいしょ	疫病	500～ 1000倍	150～300 L/10a	収穫30日 前まで	1回	散布	3回以内
トマト		1000倍		収穫前日 まで	2回以内		5回以内 (種子粉衣は 1回以内、は種後は 4回以内)
きゅうり	べと病			収穫前日 まで	3回以内		4回以内 (種子粉衣は 1回以内、は種後は 3回以内)
メロン				収穫7日 前まで	3回以内		
はくさい				収穫30日 前まで	1回		
たまねぎ		収穫7日 前まで		3回以内			

⑫ 2.0%アゾキシストロビン・1.0%メタラキシルM粒剤

作物名	適用 病害虫名	使用量	使用時期	本剤の 使用回数	使用 方法	メタラキシル 及び アゾキシストロビン を含む農薬の 総使用回数
みょうが (茎葉)	根茎腐敗病	18kg/10a	みょうが(花穂) の収穫30日前ま で、但し、花穂を 収穫しない場合に あつては開花期終 了まで	2回以内	土壌表面 散布	2回以内
みょうが (花穂)			収穫30日 前まで	3回以内	定植前作 条土壌混 和又は生 育期土壌 表面散布	3回以内
しょうが						

(2) 海外での使用方法

① 米国での使用方法

作物名	1回当り 使用量	本剤の 使用回数	栽培期間中 の総使用量	使用時期	使用方法
小豆類 (インゲン、 あずき、レンズ)、 エンドウ、その他の豆類 (リマ、スナップ他)	0.5lb. a. i. /A	1回	0.5lb. a. i. /A	栽培前または 播種時	全面土壌散布 または帯状土壌 散布
ばれいしょ	0.188lb. a. i. /A	2回	0.588lb. a. i. /A	種いも播種時	畝間処理
	0.40lb. a. i. /A			塊茎形成初期	茎葉処理
かんしょ やまいも	1.0lb. a. i. /A	1回	1.0lb. a. i. /A	栽培前または 種いも播種時	全面土壌散布 または帯状土壌 散布
だいこん	1.0lb. a. i. /A	1回	1.0lb. a. i. /A	栽培前または 播種時	全面土壌散布 または帯状土壌 散布
トマト	1.0lb. a. i. /A	1回	2.0lb. a. i. /A	定植時	全面土壌散布 または帯状土壌 散布
	0.5lb. a. i. /A	2回		生育期 (定植4~6週 間後、収穫4 週間前まで)	土壌灌注
未成熟大豆	0.5lb. a. i. /A	1回	0.5lb. a. i. /A	栽培前または 播種時	全面土壌散布 または帯状土壌 散布
ジンセン (高麗人参)	15lb. a. i. /A	4回	6.0lb. a. i. /A	収穫9日前まで	土壌表面処理 (粒剤)
核果類 (アンズ、おうとう、ネク タリン、もも、うめ、 すもも、プルーン)	2.0lb. a. i. /A	3回	6.0lb. a. i. /A	苗木は定植 後2週間以 降、成木は春 期生育前	全面土壌散布 または帯状土壌 散布
いちご	0.5lb. a. i. /A	3回	1.5lb. a. i. /A	収穫当日まで	帯状土壌散布 または土壌灌注
ブルーベリー	1.8lb. a. i. /A	2回	3.6lb. a. i. /A	収穫当日まで	帯状土壌散布 または全面土壌 散布
ナッツ類 (アーモンド、クルミ)	2.0lb. a. i. /A	3回	6.0lb. a. i. /A	苗木は定植 後2週間以 降、成木は春 期生育前	株元に全面土壌 散布または帯状 土壌散布

② EUでの使用方法

作物名	1回当り 使用量	本剤の 使用 回数	栽培期間中 の総使用量	使用時期	使用方法
にんにく(たまねぎ の使用方法を適用)	0.15kg a. i. /ha	3回	0.45kg a. i. /ha	発病初期 PHI 14~28日	茎葉散布
レモン、オレンジ、 マンダリン (Citrus fruit)	1g a. i. /m ²	2回	2g a. i. /m ²	生育始期 PHI 15~30日	土壌処理 (株元散布)
	1g a. i. /樹	2回	2g a. i. /樹	生育始期 PHI 15~30日	土壌処理 (株元点滴かん水)
	3.5g a. i. /樹	2回	7g a. i. /樹	PHI 30日	茎葉散布
	0.35g a. i. /樹	2回	0.7g a. i. /樹	PHI 15日	茎葉散布
りんご、なし (pome fruit)	1g a. i. /m ²	2回	2g a. i. /m ²	秋期又は 3月の生育初期 PHI 15~28日	土壌処理 (株元散布)
	1g a. i. /樹	2回	2g a. i. /樹	秋期又は3月 PHI 15~28日	土壌処理 (株元点滴かん水)

6. 作物残留試験結果

(1) 分析の概要

① 分析対象の化合物

メタラキシル及びメタラキシルM

② 分析法の概要

試料をアセトンで抽出し、多孔性けいそう土カラムで精製した後、グラファイトカーボンミニカラム及びフロリジルミニカラムで精製し、ガスクロマトグラフ (NPD) を用いて定量する。D-鏡像異性体のメタラキシルMとラセミ体のメタラキシルは、同じ分析法で実施されており、クロマトグラム上のピークは同一で、メタラキシルMとメタラキシルは 区別されない。

定量限界：メタラキシル及びメタラキシルM 0.005~0.1ppm

(2) 作物残留試験結果

① 水稲

水稲 (玄米) を用いた作物残留試験 (2例) において、メタラキシル 25%水和剤の 500ppm 溶液に種子浸漬後、メタラキシル 2% 粒剤を1回、育苗箱処理 (80g/箱) し

たところ、散布後 134、142 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙 1-1 1-1)

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.01 ppm、<0.01 ppm

水稻 (稲わら) を用いた作物残留試験 (2 例) において、メタラキシル 25%水和剤の 500ppm 溶液に種子浸漬後、メタラキシル 2% 粒剤を 1 回、育苗箱処理 (80g/箱) したところ、散布後 134、142 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.04 ppm、<0.04 ppm

水稻 (玄米) を用いた作物残留試験 (2 例) において、メタラキシル 25%水和剤の 500ppm 溶液に種子浸漬後、メタラキシル 2% 粒剤を 1 回、育苗箱処理 (80g/箱) し、メタラキシル 2%粒剤を計 2 回本田湛水散布 (12.5kg/10a) したところ、散布後 93 日、70 日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙 1-1 1-2)

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.01 ppm、0.02 ppm

水稻 (稲わら) を用いた作物残留試験 (2 例) において、メタラキシル 25%水和剤の 500ppm 溶液に種子浸漬後、メタラキシル 2% 粒剤を 1 回、育苗箱処理 (80g/箱) し、メタラキシル 2%粒剤を計 2 回本田湛水散布 (12.5kg/10a) したところ、散布後 93、70 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.01 ppm、0.22 ppm

水稻 (玄米) を用いた作物残留試験 (2 例) において、育苗箱当りメタラキシル 0.5%粉剤を 1 回散布 (8g/箱)、メタラキシル 4%液剤の 500 倍希釈液を計 2 回湛水散布 (500mL/箱) した稲苗を本田に移植し、メタラキシル 2%粒剤を計 2 回散布 (6kg/10a) したところ、散布後 45~89 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)} (別紙 1-1 1-3)

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.06 ppm、0.028 ppm

水稻 (稲わら) を用いた作物残留試験 (2 例) において、育苗箱当りメタラキシル 0.5%粉剤を 1 回散布 (8g/箱)、メタラキシル 4%液剤の 500 倍希釈液を計 2 回湛水散布 (500mL/箱) した稲苗を本田に移植し、2%粒剤を計 2 回散布 (6kg/10a) したところ、散布後 45~89 日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}

メタラキシル及びメタラキシルM：0.2 ppm、0.1 ppm

② だいず

だいず（えだまめ）を用いた作物残留試験（2例）において、種子重量の0.5%相当のメタラキシル15%水和剤を種子に粉衣して播種したところ、播種後108日及び100日のえだまめにおける最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 2-1）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.005 ppm、<0.005 ppm

だいず（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2例）において、種子重量の0.5%相当のメタラキシル15%水和剤を種子に粉衣して播種したところ、播種後143日及び130日の乾燥子実における最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 2-2）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.005 ppm、<0.005 ppm

だいず（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル10%水和剤の500倍希釈液を計3回散布（200、100L/10a）したところ、散布後21日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 2-3）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.005 ppm、<0.005 ppm

③ あずき

あずき（乾燥子実）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル10%水和剤の500倍希釈液を計3回散布（120、200L/10a）したところ、散布後21日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 3）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.014 ppm、0.028 ppm

④ ばれいしょ

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル25%水和剤の1000倍希釈液を計4回散布（100、500L/10a）したところ、散布後6日、14日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 4-1）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.05 ppm、0.06 ppm

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル25%水和剤の1000倍希釈液を計6回散布（100、500L/10a）したところ、散布後7~21日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 4-2）

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.11 ppm、0.16 ppm

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシルM 4.2%水和剤の413倍希釈液（2.42g/L）を計3回散布（150L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{注2)}（別紙1-1 4-3）

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.01 ppm、0.01 ppm

⑤こんにゃくいも

こんにゃくいも（球茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル1.5%粉剤を植付時に1回作条処理（10、20kg/10a）したところ、散布後139日または168日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 5-1）

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.01 ppm、0.02 ppm

こんにゃくいも（球茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル1.5%粉剤を植付時に1回全面土壌混和处理（20kg/10a）したところ、散布後139日、168日の最大残留量^{注1)}はそれぞれ以下のとおりであった。（別紙1-1 5-2）

メタラキシル及びメタラキシルM : 0.01 ppm、0.06 ppm

こんにゃくいも（球茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル2%粒剤を植付時に1回全面土壌混和处理（15kg/10a）したところ、散布後149日または158日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 5-3）

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.008 ppm、<0.008 ppm

こんにゃくいも（球茎）を用いた作物残留試験（3例）において、メタラキシル2%粒剤を植付時に1回植溝処理（5kg/10a）したところ、散布後149日または158日または141日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 5-4）

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.008 ppm、<0.008 ppm、<0.008 ppm

こんにゃくいも（球茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル2%粒剤を植付時に植溝処理（10kg/10a）したところ、散布後149日または158日の最大残留量^{注1)}は以下のとおりであった。（別紙1-1 5-5）

メタラキシル及びメタラキシルM : <0.008 ppm、<0.008 ppm

こんにゃくいも（球茎）を用いた作物残留試験（3例）において、メタラキシル 2% 粒剤を植付時に 1 回植溝処理（5kg/10a）し、培土時に 1 回株元散布（5kg/10a）したところ、散布後 114 日または 133 日または 103 日の最大残留量^{註1)}は以下のとおりであった。ただし、これらの試験は適用範囲内で行われていない。^{註2)}（別紙 1-1 5-6）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.008 ppm、<0.008 ppm、<0.008 ppm

こんにゃくいも（球茎）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 2% 粒剤を培土時に土壌表面散布（10kg/10a）したところ、散布後 151~165 日または 99~113 日の最大残留量^{註1)}は以下のとおりであった。（別紙 1-1 5-7）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.05 ppm、<0.05 ppm

⑥さとうきび

さとうきび（茎部）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 0.5% 粉剤を植付時に 1 回植溝土壌混和处理（5kg/10a）したところ、散布後 243 日の最大残留量^{註1)}は以下のとおりであった。（別紙 1-1 6）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.01 ppm、<0.01 ppm

⑦だいこん

だいこん（根部）を用いた作物残留試験（2例）において、種子重量の 0.5% 相当のメタラキシル 25% 水和剤を種子に粉衣して播種したところ、播種後 47 日、64 日の根部における最大残留量^{註1)}は以下のとおりであった。（別紙 1-1 7-1）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.04 ppm、<0.04 ppm

だいこん（葉部）を用いた作物残留試験（2例）において、種子重量の 0.5% 相当のメタラキシル 25% 水和剤を種子に粉衣して播種したところ、播種後 47 日、64 日の葉部における最大残留量^{註1)}は以下のとおりであった。（別紙 1-1 7-2）

メタラキシル及びメタラキシルM：<0.04 ppm、<0.04 ppm

だいこん（根部）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 2% 粒剤を播種時に 1 回、作条土壌混和处理（9kg/10a）したところ、処理後 53~67 日、50~64 日の根部における最大残留量^{註1)}はそれぞれ以下のとおりであった。（別紙 1-1 7-3）

メタラキシル及びメタラキシルM：0.03 ppm、0.05 ppm

だいこん（葉部）を用いた作物残留試験（2例）において、メタラキシル 2% 粒剤を播種時に 1 回、作条土壌混和处理（9kg/10a）したところ、処理後 53~67 日、50~64 日